

第20回 ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 日本館展示 「MONSOON COMMONALITY」 キュレーターに“モンスーン・アジア”を掲げる金野千恵氏が決定

国際交流基金（JF）は、2027年5月8日から同年11月21日にかけて、イタリア・ヴェネチアにて開催される「第20回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展」の日本館展示を主催します。このたび、展覧会概要が決定しましたので、お知らせいたします。

記

■第20回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 日本館展示 概要

タイトル：MONSOON COMMONALITY

主催／コミッショナー：国際交流基金

キュレーター：金野 千恵（建築家／teco 代表取締役）

出展作家：黄 聲遠（建築家／田中央聯合建築師事務所 主宰）

水 雁飛（建築家／Yanfei Architects 主宰）

西澤 俊理（建築家／NISHIZAWAARCHITECTS、滋賀県立大学 准教授）

環境編集：菅 健太郎（環境編集、建築家／Arup、京都工芸繊維大学 特任准教授）

公式ウェブサイト：<https://vенеzia-biennale-japan.jp/>

（以上、敬称略）



©teco

■第20回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 全体概要

会期：2027年5月8日（土）～11月21日（日）

会場：ジャルディーニ地区（Giardini）、アルセナーレ地区（Arsenale）、他ヴェネチア市内各所

総合ディレクター：Wang Shu、Lu Wenyu

総合テーマ：Do Architecture — For the Possibility of Coexistence Facing a Real Reality

公式ウェブサイト：<https://www.labiennale.org/en>

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（広報担当：熊倉、福島）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp

■金野 千恵 Chie Konno

建築家、teco 代表

1981年神奈川県相模原市生まれ。2005年東京工業大学卒業、2005-06年スイス連邦工科大学 奨学生、2011年東京工業大学大学院博士課程修了 博士（工学）。2011年 KONNO 設立ののち 2015年 teco 設立。2021-26年京都工芸繊維大学 特任教授。2024年スイス連邦工科大学 客員教員など。

住宅や福祉施設、公共施設などの建築設計とともに地域リサーチ、まちづくり、アートインスタレーションまでを手がけ、仕組みや制度を横断する環境づくりを試みている。

主な作品に『春日台センターセンター』（2023年日本建築学会賞（作品）他）、ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 2016 日本館展示『en（縁）：art of nexus』会場構成（tecoとして参加。展示は特別表彰を受賞）、『向陽ロジリアハウス』（2013年 平成24年東京建築士会住宅建築賞金賞 他）。

主な著書に『ロジリア 世界の半屋外空間 暇も集いも愉しむ場』（2025,学芸出版社）。

公式サイト <https://teco.studio/>



©yasuyukitakagi

■キュレーター・ステートメント

あらゆる人間が寛容に受け入れられる環境を思考する。

近代の論理から解き放たれ、都市から周縁へ、機械のコントロールから自然の知性へ、西洋のロジックから自らが生きる東洋のロジックへ——わたしたちはいま、静かな転換のただなかにいる。この転換は暮らしを再定義する契機であり、地域に身を置き、目を凝らし、耳を澄ませるといった経験が糸口となる。風土に根ざす術を見つめ直すとき、人は、社会の一部であると同時に自然の一部でもあると認識できるだろう。

わたしたちはモンスーン・アジアに生きている。

この地域は季節風の影響を受け、夏は海から陸へ湿った風が吹き込み高温多湿の雨季となり、冬は陸から海へ乾いた風が吹く乾季となる。降水量は多いものの急峻な地形が多く、一人あたりの水資源は西欧に比べて少ない。こうした条件のもとで、水を貯留・利用・循環させ、稲作を基盤とした相互扶助の仕組みが築かれてきた。また、水害などの天変地異には完全に抗うのではなく、それをしなやかに受け入れながら、地域の風景を形成してきた。

こうした風土で培われてきた営為を、モンスーン・アジアのコモナリティと呼んでみたい。

地形への領域づくり、水の扱い、食文化、リズム、生命を循環の一部と捉える死生観に至るまで。これらは、風土を生き抜くために共同して築かれてきた関係性であり、地域のなかで反復、定着されてきた環境づくりの術である。例えば、風土的特徴を共有するモンスーン・アジアに着目することで、同時代における暮らしづくりへの実験的な取り組みがみえてくる。地続きでなくとも、風土を通してわたしたちはどこかで繋がっている。

ともに生きる場の構築。

風土に根差したコモナリティを隣人とともに考え、その体験をヴェネチア・ビエンナーレ日本館で提示したい。こうした場の構築はモンスーン・アジアにとどまらず、共通性を見出しながらともに明日を生きる建築の可能性を示す。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（広報担当：熊倉、福島）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp

■黄 聲遠 Huang Sheng-Yuan (ホアン・シエンユエン)

建築家、田中央聯合建築師事務所 主宰

1963年台北市生まれ。東海大学（台中市）卒業後、イェール大学大学院にて建築学修士号を取得。1993年に宜蘭に拠点を定め、田中央聯合建築師事務所を徐々に築き上げる。2015年、展覧会『Living in Place』を開催。2018年、第16回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展の台湾館において、『Living with Sky, Water and Mountain: Making Places in Yilan』を展示。2021年、第17回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展に招かれ、作品を展示。2026年には、『輕輕地走回地球表面』を出版。同書では土地、気候、身体感覚、そして日常生活へと立ち返る建築的思考を提示し、環境、人々、時間、さらには星空とのあいだに、謙虚で繊細な関係をいかに育むか問いかけている。

公式サイト：<http://www.fieldoffice-architects.com/>



撮影：田中央工作群

■水 雁飛 Shui Yanfei (シュイ・イエンフェイ)

建築家、Yanfei Architects 主宰

1981年重慶市生まれ。中国の1980年代生まれを代表する独立系建築家の一人として広く知られている。2012年に雁飛建築事務所「Yanfei Architects」を設立し、急速な社会変容を遂げる中国を背景に、社会との協働のあり方を探求する実践を続けている。地域リサーチ、実験的インスタレーション、コミュニティとの協働、現場での施工など多岐にわたる活動を通じて、日常生活に新たな可能性をもたらす建築の創出に取り組んでいる。その作品は数多くの賞に輝いており、2018年には「AIA Shanghai Honor Award」を受賞。同年、ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展に招待参加した。2023年には「Architecture China Award」において若手建築家を対象とする「Exploration Award」を受賞。2024年、上海にて個展「Focusing the Familiar」を開催。2025年、独立系建築家の新進気鋭を顕彰する小嶋一浩賞（日本）を受賞。

公式サイト：<https://www.yanfeiarhitects.com/>



©Yanfei Architects

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（広報担当：熊倉、福島）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp

■西澤 俊理 Shunri Nishizawa

建築家、NISHIZAWAARCHITECTS、滋賀県立大学 准教授

1980年千葉県生まれ。2003年東京大学工学部建築学科卒業、2005年同大学院修了。2005-09年安藤忠雄建築研究所勤務。2009-11年Vo Trong Nghia architects パートナー、2011-15年Sanuki+Nishizawa architects パートナーとして数々のプロジェクトに携わったのち、2015年、ホーチミンにてNISHIZAWAARCHITECTS 設立。都市部の富裕層だけでなく、メコン河流域の高床式住居の設計など、自然を受け入れて暮らす人々の住居空間を調査、設計。2023年より滋賀県立大学環境科学部准教授。研究室では一般的な建物だけでなく、人、魚、鳥、虫、植物、微生物、砂、粘土、光、水、風・・・といった琵琶湖周辺の無数のアクターが生態学的に連帯する構造物の空間やコモナリティの仕組みについて研究。

公式サイト：<https://www.nishizawaarchitects.com/>



■菅 健太郎 Kentaro Suga

環境編集、Arup、京都工芸繊維大学 特任准教授

1977年東京都町田市生まれ。2001年早稲田大学理工学部建築学科卒業、2003年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。久米設計を経て2009年Arup入社。現在はサステナビリティ・リーダーを務める。2021年より京都工芸繊維大学特任准教授を兼任。

機械設備に過度に依存しないパッシブデザインや、従来の手法や価値観にとらわれない快適で心地よい空間のあり方を、研究と実践の両面から追求している。

主な作品に、森鷗外記念館（2014年BCS賞）、明圓寺納骨堂（2016年JIA環境建築賞、2018年環境・設備デザイン賞優秀賞）、東京アクアティクスセンター、石巻市複合文化施設、ドバイ万博日本館、大阪万博クラゲ館など。

マイポータル - researchmap：https://researchmap.jp/kentaro_suga



■ 第20回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 日本館キュレーター選考過程

第20回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展－日本館キュレーター指名コンペティションにおいては、国際交流基金（JF）が委嘱した建築展事業委員会6名により、厳正な選考が行われました。国内外29名の推薦委員が作成した候補者リストをもとに、事業委員会によって選出された7名の候補者に参加を依頼したところ、うち5名からご提案をいただき、最終選考の結果、金野千恵氏がキュレーターに選出されました。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（広報担当：熊倉、福島）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp

■ ヴェネチア・ビエンナーレ (Biennale di Venezia) について

ヴェネチア・ビエンナーレは、イタリア・ヴェネチア市の市内各所を会場とする国際的なフェスティバルです。1895年に最初の美術展が開かれて以来、130年以上の歴史を刻んでいます。近年、世界各地で美術を中心に、国際展が開催されていますが、ヴェネチア・ビエンナーレはそれらのモデル・ケースとなった最も著名な存在です。「ビエンナーレ」とは「2年に一度」を意味するイタリア語で、同様な国際展の多くが「ビエンナーレ」や「トリエンナーレ」（3年に一度）と命名されているのは、ヴェネチア・ビエンナーレに範をとったものとされています。ヴェネチアには現在、美術展、建築展、音楽祭、映画祭、演劇祭の各部門がありますが、建築展は、現代の建築の動向を俯瞰できる場として世界の注目を集めています。

日本は1952年に初めて公式参加を果たし、1956年に日本館の完成を経て、今日に至るまで毎回参加を継続しています。1976年からはJFが日本館展示を主催し、現在に至ります。

1996年建築展「亀裂」（コミッショナー：磯崎新 出展作家：石山修武、宮本佳明、宮本隆司）、「ここに、建築は、可能か」（コミッショナー：伊東豊雄 参加作家：乾久美子、藤本壮介、平田晃久、畠山直哉）にて金獅子賞（パピリオン賞）を受賞しています。

日本館の過去の展示内容については日本館公式ウェブサイトをご覧ください。

<https://venezia-biennale-japan.jpjpf.go.jp>

■ コミッショナーについて

1976年よりヴェネチア・ビエンナーレ日本館展示の主催者／コミッショナーを務める「独立行政法人国際交流基金（JF）」は、世界の全地域において、総合的に国際文化交流事業を実施する日本で唯一の専門機関です。1972年に外務省所管の特殊法人として設立され、2003年10月1日に独立行政法人となりました。海外に25か国・26か所の拠点を持ち、「日本の友人をふやし、世界との絆をはぐくむ」をミッションに掲げ、世界の人々と日本人の間で相互の理解を深めるため、さまざまな企画や情報提供を通じて人と人との交流をつくりだしています。2022年には、日本のヴェネチア・ビエンナーレ公式参加70年を記念して、『ヴェネチア・ビエンナーレと日本』（平凡社）を出版しました。国際交流基金 公式ウェブサイト：<https://www.jpjpf.go.jp/>

■ 広報用画像

画像をご希望の方は、広報担当の熊倉、福島（press@jpjpf.go.jp）までご連絡ください。

【ご使用時の注意点とお願い】

- ・画像のご使用は本展の広報目的のみに限ります。
- ・画像の掲載に際しては、作家名、作品名、作品情報及び所定のクレジットを必ず記載してください。
- ・画像の改変（トリミング、部分使用、文字のせ含む）、画像の二次使用はご遠慮ください。
- ・事実関係確認のため、出版前に記事校正を広報担当者までお送りください。
- ・掲載誌または記載記事を広報担当者までお送りください。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（広報担当：熊倉、福島）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpjpf.go.jp

■ 展示 イメージ図



© t e c o

■ 金野 千恵 参考作品



春日台センターセンター ©morinakayasuki



向陽ロッジアハウス ©chiekonno

■ 黄 聲遠 参考作品



Luodong Cultural Working House
© Fieldoffice Architects, photo by Min-Jia CHEN



Jin-Mei Parasitic Pedestrian Pathway across Yilan River
© Fieldoffice Architects

■水 雁飛 参考作品



Papago Land © Yanfei Architects



Xianlin School © SCHRAN

■西澤 俊理 参考作品



House in Chau Doc : ©大木宏之

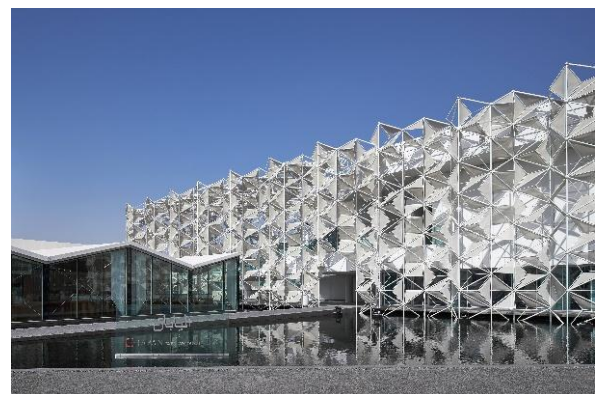


Restaurant of Shade : ©大木宏之

■菅 健太郎 参考作品



明圓寺納骨堂 : ©Arup



ドバイ万博日本館 : ©Japan Pavilion Dubai Expo 2020

以上

この件に関するお問い合わせ :

国際交流基金 ブランド推進部 広報課 (広報担当 : 熊倉、福島)

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp